

## 大西五郎さん追悼

写真は東海ジャーナリスト臨時増刊「大西五郎さん追悼」号。「放送記者・大学教授・労組リーダー……」「正義と信念貫いた85年の生涯」と。

ジャーナリスト・大西五郎さんに、私もお世話になった。大西さんから『ジャーナリスト』「月間マスコミ評」寄稿を引き継ぎ、10数年にもなる。大西さんのおかげで、マスコミやメディアに関心を持ち続けてきた。感謝している。

大西五郎さんを偲び、私も追悼号に寄稿させてもらった。1月に送った原稿を紹介したい。



大西さんと初めてお会いしたのは、今から40年前の1979年の夏ごろであった。この年の4月に名古屋市立女子短大になんとか就職が決まり、緊張しながら講義をはじめた。大学の同僚で先輩の斎藤勇さんに誘われて、「8月名古屋集会」を準備する集まりに行き、大西さんたちの話に耳を傾けた。

この8月集会では、大西さん、遠藤雄久さん、加藤剛さん、古木民夫さんをはじめ、多くのジャーナリストと一緒に活動をした。大西さんは、いつも語りかけるような調子で、企画などを提案していたのが記憶に残る。集会では、何度か名調子の司会をつとめられた。大西さんと「桐生悠々」の演劇を共演？したことも忘れられない。幼き頃から吃音に悩まされた私は、大西さんから「話し方」を勝手に学ばせてもらった。

大西さんには、名古屋市立大人文社会学部の非常勤講師をお願いした。「マスコミ論」を広い教室で講義してもらった。よく通る声で講義されていたのを、教室近くで聴いたことがある。もちろん、わかりやすく説得力に富む大西さんの講義は、学生の評判もよかった。その後、愛知大で本格的に教師としても活躍された。

大西さんには、とりわけ感謝せねばならないことが二つある。一つは、日本ジャーナリスト会議機関紙『ジャーナリスト』「月間マスコミ評」への寄稿を私にバトンタッチしてもらったことである。もう一つは私の著書の書評を書いてもらったことである。

あれは2006年の夏だったと思う。大西さんから電話で依頼があり、迷いながらも引き受けることにした。それで10月号から「月間マスコミ評」に寄稿することになったが、最初は悪戦苦闘しながら書いたが、大西さんのように書けなかった。とにかく隔月（最近では3ヶ月おきに）で書き続け、13年余りになる。いまでは、私にとって貴重な「発言」の場となっている。

大西さんは「月間マスコミ評」を私にバトンタッチして、ご自身は「新聞の片隅に載

ったニュースから」を書かれていた。その 157 は安倍首相が九電会長らと会食中に「川内はなんとかします」と発言したという、2014 年 7 月 19 日の朝日新聞の記事を取り上げている。コメントの最後にこう書いている。

安倍首相は表向きの「地元の詳細を得た上で再稼働」とは別に、「なんとかします」と財界に約束しました。安倍首相は集団的自衛権の問題で、「私は国民の安全を守る責任がある」と何度も胸を張りましたが、「国民の安全」よりも、「財界の要請」を優先するという安倍政権の本質が現れたことをこの「なんとかします」は示しています。

「マスコミ評」への寄稿をまとめて、名古屋市大を退職して数ヶ月後、2014 年夏に『災後の新聞』と題した本を刊行した。今回、大西さん追悼を書くにあたって、この本についての大西さんからのメールを探しまわった。それで見つけたのが、2014 年 9 月 14 日 13 時 33 分、件名「朝日新聞への投書」である。抜粋して紹介させていただく。

本日の朝日新聞の先生の投書「時の権力への批判緩めるな」拝読しました。おっしゃる通りだと思います。

ただ私は以前から朝日新聞の「政治報道」が「政局報道」の色合いが濃いことが気になっていました。首相官邸の記者クラブに所属していた時の印象で、朝日新聞は優秀な記者が多く、それだけ政権に食い込んでいるため、政権や政党の内部事情に詳しいということが政局報道を得意とする素地を作っていると思います。政局報道の場合記者の主観が入り込む余地があります。「吉田調書問題」でもそのような欠陥が現れたのではないのでしょうか。

先生ご指摘のように、朝日の現場記者が萎縮しないように周りから励ますことも大事だと思っています。

ところで、「災後の新聞」をジャーナリスト会議の機関紙の書評で採り上げて紹介することになりました。私が書くことになりました。今また読み返していますが、日本の政治が 10 年以上たっても変わっていないし、マスコミも進化していないということに気づかされました。貴重な「歴史書」でもあると感じました。

ところで伺いたしますが、本のタイトルを「災後の新聞」としたのはどのような理由からでしょうか。お教えてください。よろしく願いいたします。

大西 五郎

あの朝日新聞「騒動」の 2014 年 9 月 14 日、私の「声」投稿が掲載された日の午後にもらったメールである。やはり大西さんらしい鋭い指摘だ。そして、拙著『災後の新聞』の書評を引き受けてくださり、本のタイトルについて質問されている。これも大西さんらしい、繊細さを感じたものだ。書評も的を得たものであった。

大西さん、長い間、本当にありがとうございました。心より感謝しています。

(2019 年 4 月 25 日)